國學院大學学術情報リポジトリ

『枕草子』執筆と流布の経緯：「跋文」の解釈から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 津島, 知明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000833

『枕草子』執筆と流布の経緯

――「跋文」の解釈から

津島知明

キーワード
雑纂本枕草子　跋文　初稿本　再編本

はじめに

雑纂本枕草子には、巻末に跋文と呼ばれる文章が付されている。自らの著作を語るというスタイルも興味深いが、書名や料紙の由来、執筆や流布の過程など、注目すべき内容が多く含まれている。しかし、書名となった「枕」が何を意味するかをはじめ、解釈が乱立していまだ定まらない。本稿は問題の山積する跋文の解釈に一石を投ずるものであるが、諸注のなかでも、特に詳細かつ独自性にも富む『枕草子解環』説の検証が、おのずとその中心になってゆくだろう。

一、跋文解釈の問題点

まずは、三巻本の本文を四段落に分けて引いておく。[1]

この草子、目に見え心に思ふ事を「人やは見むとする」と思ひて、つれづれなる里居のほどに書きあつめたるを、あいなう、人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、「よう隠しおきたり」と思ひしを、心よりほかにこそ洩り出でにけれ（一段落）。

一段落の内容は、次の四点にまとめられよう。

一、「この草子」は見たり感じたりした事を「人は見るまい」と思って書き集めた。

二、執筆は所在ない「里居のほど」になされた。

三、「人」にとって不都合な「言い過ぐし」と取られかねない内容も記されていた。

四、それゆえ「隠しておく」つもりだったが「心ならずも」世に出てしまった。

続く二段落では、次のような料紙拝領の次第が明かされる。

宮の御前に内の大臣の奉りたまへりけるを、「これに何を書かまし。上の御前には史記といふ文をなむ、書かせたまへる」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申ししかば「さは得てよ」とて給はせたりしを、あやしきをこよや何やと、尽きせずおほかる紙を書き尽くさむとせしに、いと物おぼえぬ事ぞおほかるや（二段落）。

中宮に内大臣伊周が献上した紙があり、[2]「これに何を書こうか」と問われたので「枕でございましょう」と申し上げたところ、頂いて執筆に励むことになったのだという。執筆は里での「私的な営み」だったと、一段落には記されていたが、右からは中宮女房の「公務」としての側面が窺える。一見すると一段落と二段落には接点がなく、断絶さえ感じさせる。この点を疑問視した『解環』は、次のように指

摘していた。

宮中の局にいて執筆したのでは人目につくから、宿下がりの閑暇な折りに内密に書き溜め、実家に保存しておいたという体裁にしているが、このような私的内密の執筆、そして不慮の漏洩ということは、伊周献上の料紙に中宮のご意向を承けての名誉の著述にふさわしくない。また作中の回想的章段に自讃談として取り上げなかったことも不審である。私的内密の執筆という条件が、宮仕え女房の勤め先でのあわただしい日常に比して真実性に富んでいるとすれば、むしろ、伊周献上・中宮下賜という設定の方が虚構となる。その両方の矛盾するところに、虚構が馬脚を現しているとさえ言えよう。（四四〇頁）

その上で『解環』は、二段落は「興味本位の虚構的な創作」であるとの判定を下した。これが一理あるように思えるのは、以下三段落・四段落と読み進めても、二段落のみが孤立しているように見えるからだろう。

おほかたこれは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などをも木草鳥虫をも言ひ出だしたらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり」とそしられめ、ただ心一つにおのづから思ふ事をたはぶれに書きつけたれば、「物に立ちまじり、人並み並みなるべき耳をも聞くべきものかは」と思ひしに、「はづかしき」なんどもぞ見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞあるや。げにそもことわり、人のにくむを「よし」と言ひ、ほむるをも「あし」と言ふ人は、心のほどこそおしはからるれ。ただ、人に見えけむぞねたき（三段落）。

三段落には、これは「心一つ」に思い浮かぶ事を戯れに書き付けたので、世間並みの評判は期待していなかったが、読んだ人からは意外にも「はづかしき」と評されたこと、残念なのは人目に触れたことだ、とある。一段落の解説と大筋では重なるようだ。最後の四段落には、

左中将まだ伊勢の守と聞えし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり、とぞ本に（四段落）。

とあり、一段落と三段落で「想定外だった」とされてきた流布の経緯が具体的に明かされている。「伊勢の守」（源経房）が里を訪れたさい、畳に載った「この草子」を差し出してしまい、そのまま彼に持ち去られてしまったのだという。

謎が多いとされる跋文だが、実は二段落さえ除外すれば、とりあえず論旨は明解になる。「この草子」は、心に浮かぶままを里で書き進め、人に見せるつもりはなかったのに、経房によって世に広められてしまった、というわけだ。では『解環』の指摘するように二段落のみを虚構と認定すべきなのか。だが、あえて虚構を盛り込もうとするならば、何よりそれらしい辻褄合わせが必要だったはずである。そうした努力をまったく感じさせない、無造作にも見える跋文の情報提示は、各々の記事が事実であり、読者にも事実として受け入れられるという認識が、少なくとも書き手にあったことを窺わせる。そこで本稿では、どこかを虚構として切り捨てる前に、まずは可能な限り記載内容を受け入れてみたいと思う。ただし、跋文のみを眺めていてもこれ以上の事実認定は困難だろう。よって以下、解釈の手がかりを本編の記事に求めていきたい。

二、執筆に関わる記事

跋文と並んで、枕草子執筆に関わる記事として注目されてきたのが、二六一段である。その二六一段に対しても『解環』には注目すべき言及があった。二六一段からは「長徳二年秋の長期の里居に、中宮ご下賜の料紙に書き始めた」作品の存在が確認できること、それはおそらく「類想段を主とし、随想段を従とした原初狭本類纂型の『枕草子』であった」（四四五頁）という指摘である。では実際に二六一段からは何がどこまでわかるのか。改めて冒頭から見ていきたい。

御前にて人々とも、また物仰せらるるついでなどにも、

世の中の腹立たしうむつかしう、かた時あるべき心地もせで、ただいづちもいづちも行きもしなばやと思ふに、ただの紙のいと白う清げなるによき筆、白き色紙、みちのくに紙など得つれば、こよなうなぐさみて「さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめり」となむおぼゆる。また高麗ばしの筵、青うこまやかに厚きが、縁の紋いとあざやかに黒う白う見えたるを、ひきひろげて見れば、「何か、なほこの世はさらにさらにえ思ひ捨つまじ」と、命さへ惜しくなむなる。

と申せば、「いみじくはかなき事にもなぐさむなるかな。姨捨山の月は、いかなる人の見けるにか」など笑はせたまふ。さぶらふ人も「いみじうやすき息災の祈りなり」など言ふ。

もう生きていたくないと思うような時も、「白くきれいな普通紙に上等の筆」「白い色紙」「みちのくに紙」などが手に入ったなら、あるいは「高麗縁の筵の、青々として編目が細かく厚い」物を広げたなら、心が慰められて命まで惜しくなる——。こうした〈私〉の発言が、まずは紹介されている[3]。それを中宮には「他愛ない事にも慰められることよ」と笑われ、同僚からは「たいそうお安い息災の祈りだ」と言われたという。これが次のような逸話へと展開してゆく。

さて後ほど経て、心から思ひ乱るる事ありて里にあるころ、めでたき紙二十を包みて給はせたり。仰せ言には「とくまゐれ」などのたまはせて、「これは聞しめしおきたる事のありしかばなむ」「わろかめれば寿命経もえ書くまじげにこそ」と仰せられたる、いみじうをかし。思ひ忘れたりつる事をおぼしおかせたまへりけるは、なほただ人にてだにをかしかべし。まいて、おろかなるべき事にぞあらぬや。心も乱れて啓すべきかたもなければ、ただ

かけまくも かしこき神のしるしには つるのよはひとなりぬべきかな

あまりにや、と啓せさせたまへ

とてまゐらせつ。台盤所の雑仕ぞ御使には来たる。青き綾の単取らせなどして、まことにこの紙を草子に作りなどもてさわぐに、むつかしき事もまぎるる心地して、をかしと心のうちにもおぼゆ。

その後、思い悩む事があって〈私〉は里に下がっていた。「心から思ひ乱るる事」とあるので、通常の里下がりではなかろう。諸注の指摘するように、一三八段に描かれた長徳二年（九九六）の長期里居が該当すると思われる。同段によれば、同僚たちから「左の大殿（道長）方の人知る筋にてあり」と疑われたことから、嫌気がさして長く里に下がっていたのだという。よって右には、その際に中宮からなされた帰参の催促が描かれていることになる。贈られた「紙二十」は、むろん冒頭の発言を受けてのこと。それを覚えてくれていた中宮に感激し、早速「かけまくも」の歌で謝意を伝え、使いにも心尽くしの禄を与えている。さらにその紙は「草子」に整えられたとある。

だが何より注目すべきは、中宮の心遣いに感激はしているものの、「とくまゐれ」なる命には応じていない点だろう。戻らない〈私〉に、中宮は次の一手を打ってくる。

二日ばかりありて、赤衣着たる男、畳を持て来て「これ」と言ふ。「あれは誰そ」「あらはなり」などものはしたなく言へば、さし置きて往ぬ。「いづこよりぞ」と問はすれど「まかりにけり」とて取り入れたれば、ことさらに御座といふ畳のさまにて、高麗などいときよらなり。心のうちには「さにやあらむ」なんど思へど、なほおぼつかなさに人々出だして求むれど失せにけり。あやしがり言へど、使のなければ言ふかひなくて、「所違へなどならば、おのづからまた言ひに来なむ。宮の辺に案内しにまゐらまほしけれど、さもあらずはうたてあべし」と思へど、「なほ誰かすずろにかかるわざはせむ、仰せ言なめり」と、いみじうをかし。

二日ほど経って、今度は「畳」が届く。「御座といふ畳のさまにて、高麗などいときよらなり」によれば、高麗縁を付けた見栄えよき畳表か。これも冒頭の発言を受けたものだが、今回は伝言がない。赤衣姿の使いは「人々出だして求むれど失せにけり」とある所から、即座に（名乗らずに）帰るように命じられていたらしい。先に紙を贈った時点で、意向（とくまゐれ）は伝えてあるからだ。中宮の「仰せつけなのだろう」と察するも、ここでは帰参はおろか返信さえしていない。

二日ばかり音もせねばうたがひなくて、右京の君のもとに「かかる事なむある。さる事やけしき見たまひし。しのびてありさまのたまへ。さる事見えずは、かう申したりとな散らしたまひそ」と言ひやりたるに、「いみじう隠させたまひし事なり。ゆめゆめまろ

が聞えたると、な口にも」とあれば、「さればよ」と思ふもしるくをかしうて、文を書きてまたみそかに御前の高欄に置かせしものは、まどひけるほどにやがてかけ落して、御階の下に落ちにけり。

二日ほど様子を見て、いよいよ「中宮からの贈り物だ」と確信は深まるのだが、右京の証言を得るまで〈私〉は文を書いていない。中宮に対してここまで反応が鈍いのは異例である。理由は、いまだ帰参には踏み切れなかったからだろう。ようやく筆を取り、高欄に置かせようとした文は、あわてた使いが御階の下に落としてしまったという。正体を隠した中宮の使者に倣い「みそかに」と言い渡したので、使いが緊張してしまったものか。ただその旨の報告を受けたのなら、本来は次の手を打ってしかるべきである。しかしその後の次第も、帰参についても語られないまま本段は閉じられる。かくて二六一段には〈中宮からの出仕の催促に応じられなかった〉顛末が、実は描かれていることになる。

三、「この草子」執筆の経緯

その後に果たされた〈私〉の帰参は、一三八段に描かれており、時期は「山吹」の季節、翌年の晩春頃と見なされる。[4] 一三八段では帰参までの状況が、

「まゐれ」など度々ある仰せ言をも過ぐして、げに久しくなりにけるを、

と総括されていた。この「度々ある仰せ言」の具体例が先の二六一段に描かれていたわけだが、時期としては里下がり間もない頃が想定されようか。よって「過ぐして」は全く返答をしなかったわけではなく、「帰参しなかった」次第を言う。ではその後の「げに久しくなりにける」里居の日々を、〈私〉はどのように過ごしたのか。前掲二六一段の「この紙を草子に作りなどもてさわぐ」という一節が、改めて注目されよう。もちろん草子を作って終わりというわけではあるまい。それを明かしているのが、「この草子」を「つれづれなる里

居のほどに」書き集めたとする跋文の記事となる。

帰参しない代わりに、清少納言は里で執筆に勤しんでいた。ここまでは先の『解環』説が首肯されよう。ただしそれは果たして「類想段を主とし、随想段を従とした原初狭本類纂型」と見なせるのだろうか。とりあえず二六一段にも一三八段にも、内容に関する情報はなかった。『解環』には、清少納言はこの辛い時期に「気紛らわしに、秀句・物名の類想文を書き始めた」（四四七頁）、それは「純粋な精神的慰藉であり、苛立つ神経の沈静という、まじりけのない筆のすさびであったに違いない」（四四八頁）とあるが、そもそも記されたのが「類想文だった」ことを前提にした説明である。それ以上の理由は明らかにされていないが、想像するに、ひとつには『解環』がこの里居を「長徳二年秋まで」と、通説どおり短期間に見積もっている点があげられよう。ひと月ふた月ほどの執筆なら、内容は短い類聚段や随想段がふさわしいと判断したのかもしれない。また加うるに、堺本のような類纂形態の伝本の存在も念頭にはあったのではないか。かつての「類纂原形説[5]」は斥けられ、『解環』も現存の類纂本自体は「不純な伝本」として評価しないが、それはそれとして、堺本の形態に初稿本の面影を認めようとする説は今も根強い。だが、同じ類纂形態の前田家本が早くから後人の編纂本と認定されてきたのと同様、現存の堺本諸本も、雑纂本を独自のこだわりをもって再編集した結果と見なせることが検証されている[6]。現存本の向こうに原堺本（古堺本）を想定して、それを「原初狭本」の形態と見なすのは、仮説の上に仮説を重ねることになる。

「原初狭本」なるものについて、今日に残された手がかりは、つまるところ跋文の記事のみである。そこに「人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば」とあるからには、「人」に関わる（日記回想段に該当するような）記事が当初から少なからず含まれていたと認めるべきだろう。一方、それが中宮から頂いた料紙である以上、執筆したならば中宮には披露する義務がある。よって跋文の「よう隠しおきたりと思ひしを」とは、「世間に公表するつもりはなかった」の意となろう。ただしお目にかけたくても、中宮には度々の催促に応じられなかった負い目がある。さらに同僚との軋轢を抱えたままの状況（一三八段）が、公式の献上を躊躇させたのだろう。跋文によれば、そこで白羽の矢が立ったのが源経房だった。経房は八一段では里下がり先を教えた数少ない男性の一人として紹介され、一三八段では中宮御所を経由して実際に里を訪れている。その経房が偶然持ち出したという体裁が、結果として取られたのだ。自分の出仕を今も中宮はお望みなのか、もはや自分への関心は失われているのではないか。「度々ある仰せ言をも過ぐして」きた身としては、まずそこに不安がある。執筆した「草子」が届けられれば、さしあたり「げに久しくなりにける」里居の業務報告にはなるはずだ。

経房が訪れた際、「草子」は「畳」に載せて出されている。これを二六一段に描かれた中宮ゆかりの品々と見なす説はこれまでもあったが（『鑑賞』など）、むしろ明確にそう認定することで、跋文四段落の意味は明らかになる。まず「畳」だが、客用の敷物なら褥などがふさわしく、これは経房に見せるために「端の方」から差し出されたものと思われる。中宮から贈られた大切な畳（二六一段によれば高麗縁の付いた畳表）であればなおさら、むやみに人に使わせたりするまい。あるいは「これは中宮から頂いた畳なのです」と言って差し出したのかもしれない。そして「畳」には「草子」が載っていた。それをあえて「まどひ取り入れ」て見せることで、経房の興味は確実に「畳」から「草子」へと誘導されよう。そこで、これが（畳と同様に）元は中宮から「帰参の催促に」贈られた紙であること、しかしまだ「帰参には踏み切れない」現状などを語れば、経房なら意図を察してくれるはず、「では私がお持ちしましょう」という流れになると踏んだのではないか。二六一段に見える「畳」と「草子」の来歴、八一段以下に描かれる経房との信頼関係、一三八段に記された帰参までのいきさつを踏まえたとき、跋文の遣り取りはこうした内実を想像させる。

さらに跋文には「人やは見むとする」「人に見えけむぞねたき」とも記されていたが、この「人」は当然ながら、お目にかけるべき中宮（周辺）以外の人を指している。[7]「この草子」は、結果としてそうした「人」（具体的には男性貴族達か）にまで広まった。それが「心よりほかにこそ洩り出でにけれ」の実態だろう。しかも「洩り出で」ただけでなく、「はづかしき」などという評判まで聞こえてきたのだという。[8]その心境が、跋文にはとまどいとして表明されているわけだ。同時にそれは、跋文執筆の時点では、そのような「人」までもが読者として意識されていることを意味する。

実は『解環』にも、この「畳」のくだりは「演技」「演出」だろうとの指摘があった（四四六頁）。ただしそれは「経房の手を通して、この作品を世間に広めさせ、あわよくは、左大臣道長の目にも触れさせて、自己の才能を、やがて入内もするであろう、道長の長女彰子付きの女房として買わせよう」との算段から、と説明されている（四四八頁）。ならば未遂に終った売り込みの算段を、書き手はわざわざ記したのか。もちろん事件時の真意までは証明できない。押さえるべきは、このやりとりが跋文の最後に記されたことの意味だろう。経房に関しては、〈私〉と中宮御所とを結ぶ希少なルートとして、なおかつ信頼できる人物として、ここまで書き手は描いてきた。里から中宮の元へこの草子を託すなら、適任者は彼しかいないことになる。結果としては中宮以外の「人」にまで草子は広められたらしいが、そちらについては想定外だったというのが跋文の主張である。いま枕草子は、道長全盛の世に送り出されようとしている。その際、かつ

て「この草子」を世に広めた功労者が（道長の養子格たる）経房だったという事実に、書き手が価値（宣伝効果）を認めていたということだろう。[9] 算段というのなら、そうした執筆時の算段こそを読み取るべきである。

かくて跋文に見える執筆の経緯は、二六一段や一三八段の記事と付き合わせることで、以下のようにまとめられよう。

① 長徳二年（六月以降か）清少納言は里に下がっていた（一三八段）。
② 中宮は紙や畳を贈って帰参を促すが、戻らなかった（二六一段）。
③ 里にあって「この草子」の執筆に勤しんだ（跋文）。
④ 執筆した「この草子」は経房によって持ち出された（跋文）。
⑤ （草子を目にしたであろう）中宮は、頃合を見て再び帰参を促す（一三八段）。
⑥ 長徳三年の山吹の咲く頃（晩春か）帰参が果たされる（一三八段）。
⑦ 評判になった自身の草子をまとめ直し、あとがきも付した（跋文）。

四、「紙」と「草子」をめぐる記事

残る問題は、この①～⑦の経緯と跋文二段落との関係である。右の流れが明解に見えるのは、実は二段落がとりあえず除外されているためでもある。では、ここに二段落を組み込むことは可能なのだろうか。その前に、前節のまとめから明らかになる二つの点を確認しておきたい。

1、跋文を付してまとめている草子（再編本と言うべきもの）以前に、経房が持ち出して広まった草子（初稿本と言うべきもの）が存在した。

2、前掲①～④までは、その初稿本の執筆と流布の経緯を語っている。

この点を踏まえれば、①～④の経緯で記され流布した作品こそが、跋文で「この草子」（一・四段落）と呼ばれ、解説されていることになる。ちなみに枕草子には、もう一例「この草子」の語が見える。

この草子を人の見るべきものと思はざりしかば、あやしき事もにくき事も〈ただ思ふ事を書かむ〉と思ひしなり（一三六段）。

「とりどころなきもの」の末文だが、諸注指摘するように跋文（一・三段落）に通じる内容である。よって右も含めた「この草子」（全三例）はすべて、中宮（周辺）以外の「人」には見せるつもりはなかったとされる初稿本枕草子を、さしあたり指していると見なされよう。[10] つまりはその初稿本について、二六一段で料紙の由来が、跋文で流布の事情が、それぞれ明かされていたわけだ。となれば、おのずと気になるのは当の再編本の方の料紙である。初稿本については縷々語られているのに、再編本に関する逸話は特に残されなかったのだろうか。

ここで改めて、初稿本にまつわる記事（二六一段と跋文）以外から、執筆行為と関わりそうな「紙」の用例を洗い出しておきたい（包み紙や扇の紙、紙そのものへの品評など、執筆に関わらない例は除く）。

（A）心ゆくもの……白く清げなるみちのくに紙に、いといと細く書くべくはあらぬ筆して文書きたる（二九段）
（B）物も言はで硯にある紙の端に、「かづきする……」と書きてさし出でたれば（八一段）
（C）卯杖の頭包みたる小さき紙に、「山とよむ……」（八四段）
（D）物の蓋に小山作りて白き紙に歌いみじう書きてまゐらせむとせし事など（八四段）
（E）「ただこれしてとく言へ」とて御硯蓋に紙などして給はせたる（九六段）
（F）紙の散りたるに「したわらびこそ……」と書かせたまひて（九六段）
（G）筆紙など給はせたれば「九品蓮台の間には……」など書きてまゐらせたれば（九八段）
（H）ふところ紙に「すこしはるある……」とあるは、げに今日のけしきにいとようあひたるも（一〇三段）
（I）紙には物も書かせたまはず。山吹の花びらただ一重を包ませたまへり（一三八段）
（J）右近の将監みつなにとかやいふ者して、畳紙に書きておこせたるを見れば（一五六段）
（K）こと紙に雨をいみじう降らせて、下に「ならぬ名の……」と啓したれば（二二三段）

（L）「みな人の……」この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる（二二四段）
（M）唐の紙の赤みたるに草にて「山ちかき……」とぞ書かせたまへる（二二六段）
（N）うれしきもの……みちのくに紙、ただのも、よき得たる（二六〇段）
（O）紙のまたいみじう赤きに、ただ「あらずとも」と書きたるを（二七六段）
（P）浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり（二八四段）

この中で（A）（N）（O）以外が日記回想段に属する記事となる。すべて歌や文の遣り取りに使用されたか、使用されようとした「紙」であり、草子に仕立てられたようなものは一例も見出せない。では「草子」の方はどうか。前掲の（初稿本にまつわる）一三六段・二六一段・跋文以外では、次のような例がある。

（ア）円融院の御時に「草子に歌一つ書け」と殿上人に仰せられければ（二一段）
（イ）古今の草子を御前に置かせたまひて（二一段）
（ウ）草子をひろげさせたまひて「その月何のをりぞ……」と問ひきこえさせたまふを（二一段）
（エ）御草子に夾算さして大殿籠もりぬるも、まためでたしかし（二一段）
（オ）二藍 葡萄染などのさいでの押しへされて草子の中などにありける、見つけたる（二八段）
（カ）夏虫……火近う取り寄せて物語など見るに、草子の上などに飛びありく（四一段）
（キ）よき草子などは いみじう心して書けど、かならずこそ きたなげになるめれ（七三段）
（ク）なまめかしきもの……薄様の草子（八六段）
（ケ）人の草仮名書きたる草子など、取り出でて御覧ず（一七八段）
（コ）箱の蓋に草子どもなど入れて持て行くこそ、いみじう呼び寄せて見まほしけれ（二二一段）
（サ）をかしと思ふ歌を草子などに書きておきたるに、言ふかひなき下衆のうち歌ひたるこそ、いと心憂けれ（二九二段）

こちらは（ア）～（エ）（二一段）と（ケ）（一七八段）が日記回想段に該当するが、すべて天皇か中宮の御前の草子で、（イ）（ウ）（エ）は特に古今集を指す。それ以外は類聚段随想段の用例なので、具体的な履歴などはわからない。かくて現存本による限り、再編本に関わるような「紙」や「草子」の情報は、やはり皆無ということになろう。

五、跋文二段落の位置付け

内大臣の料紙を拝領したことが、跋文に初めて見えることについて、『解環』では次のような疑問が呈されていた。

このように名誉な事実を経験したのであるとしたら、どうしてその事実について本文中に回想段の一章を立て、詳細な情景描写や会話の記録をとどめることをせず、跋文の中のほんの数行として簡略に片付けてしまったのであろうか。（四四五頁）

前節で確認したように、本編にその「紙」や「草子」に関する痕跡すら見られないことが、虚構説の根拠の一つとされているわけだ。だが、そもそもどこにどう記すかと虚実とは全く別の問題である。逆に跋文二段落こそを、本編には記さなかった重要情報が最後に開示された一節と見なすこともできよう。

記事にある伊周献上の料紙が存在したとする。帝が史記を書写させた紙と同等と思しきものならば、上質かつ相当の量ということになる（能因本長跋では古今集の書写が提案されている）。そのような紙を頂いたなら、自由気ままに書き散らすというより、浄書のような気構えで執筆には臨むべきだろう。「わろかめれば」（二六一段）とあった初稿本の紙との対比からも、それこそは再編本の料紙として、跋文に満を持して紹介されるにふさわしい。跋文の一段落と二段落に接点が見えないのは、それぞれが別々の料紙について語っているからではないか。書き手はまず一段落で、すでに世に知られている（二六一段で料紙の由来が記された）「この草子」（初稿本）の執筆事情を紹介した。転じて二段落では、いま筆を擱こうとしている当の再編本について、料紙の来歴を披露して見せた。こう解せば、跋文内部

にあるとされてきた矛盾は解消されよう。よって伊周献上の料紙は、初稿本流布の後、前掲⑥と⑦の間に清少納言に下賜されたものと見なされる。

誤解を生じさせた最大の要因は、「内のおとど」という伊周の呼称にあるのだろう。伊周が内大臣だったのは、正暦五年（九九四）八月から長徳二年（九九六）四月まで。そこで料紙献上は、この時期のいつかと解されてきたわけだ。ただそもそも、それは清少納言への下賜と同時期とは限らない。仮に下賜が伊周の内大臣時代だとすると、初稿本の執筆以前、それとは別に伊周献上の料紙も手元にあったことになり、執筆に関わる時系列が錯綜する。あるいは経房が伊勢守時代（長徳三年正月まで）に持ち出した草子が、献上の料紙に記されたものならば、現存本に見える日記回想段の多くが書かれていないことになる。現存のような雑纂本が成立するまでに、さらにまた多くの紙ないし草子が必要だったことになり、その来歴も不明となる。

ひとつ考えられるのは、「内のおとど」が前官呼称である可能性である。旧稿にて述べたように[11]、本編で八章段に登場する伊周は、左遷以前はたとえ事件時に内大臣であっても「大納言（殿）」で統一されていた。九六段（伊周が無位無官だった長徳四年の話）のみ「うちのおほい殿」と呼ばれていたわけだが、それは左遷事件には触れまいとする書き手の基本姿勢と関わっていよう。こうした本編での呼び分けに従えば、跋文の事件時も政変後ということになる。ただ一方で、料紙献上というトピックは、無位無官の人物よりは内大臣にふさわしいことも確かだろう。つまるところ跋文の記事には、九六段のように時や場所を特定する手立てがなく、実際の事件時は不明とするほかない。ただ中宮への献上を内大臣時代と見なすとしても、清少納言に下賜された時期（また当然ながら再編本をまとめている時期）は、初稿本成立の後、再出仕（前掲⑥）以降と考えるべきである。

九六段は「物のをり」（公務）の詠歌を中宮から免除された次第を語っていたが、それを中宮がいとも簡単に許したのは、やはり「この草子」（初稿本）を目にしていたからではないか。定型に収まらない表現の可能性、そこにこそ発揮される清少納言の才能に、この時期の中宮は注目し、新たな公務を与えたのだ。だとすれば、詠歌御免と料紙拝領は同時期だったか、少なくとも書き手にとって緊密に関わる（表裏一体の）出来事だったと解される。九六段と跋文にのみ、伊周の呼称に内大臣が選ばれているのは、ふたつの逸話の親和性によるものと見ておきたい[12]。

六、「枕にこそは」の解釈

初稿本と再編本の成り立ちを、以上のように見なしたとき、研究史上の難問「枕にこそは」の謎も解けてくる。「これに何を書かまし、上の御前には史記といふ文をなむ書かせたまへる」という中宮の問いに「枕にこそは侍らめ」と答えたところ、料紙（草子）は下賜されたという。しかし周知のように、この「枕」が何を意味するかについていまだに定説をみない。

『新編全集』の解説に「枕」の主な解釈が分類整理されているので、引いておく。

（1）備忘録、手控え、心覚えのメモ。

（2）大切な、人に見せるべきではないもの。

（3）寝具の枕。

（4）枕詞、題詞。

（5）枕ごと、枕詞は歌文の中心となるものであるから、「枕草子」はそれを書き集めたもの。

（6）「史記」（敷き）に対して「枕」（頭）を掛詞として、枕詞の意。

（7）『文選』二三『設論』の「徒ニ経ヲ枕ニシ、書ヲ藉キ、衡門ニ紆体スルヲ楽シム」による。

（8）白楽天の「秘省後庁」の「白頭ノ老監書ヲ枕ニシテ眠ル」による。

『解環』は（6）説に属するが、さらに「枕」は「馬鞍（まくら）」にも通じ、それが「史記＝鞍褥（しき）」の上に位置することになると指摘、こうした天皇への非礼となるようなやりとり自体「全くの虚構であるといわねばならない」（四四一頁）と、これも虚構説と結びつけられている。右以降では、「『しき』にあやかって四季を枕にした和の作品を書くことを宮に提案した」とする最新の説もある。[13]

改めて近代以降の諸注を通覧すると、（1）説に拠るものが最も多く、一応の通説と言えようか。さらにそれは、備忘録・手控えの類が「枕草子」と呼ばれていて、その略称が「枕」だったという解釈とセットになっている（『金子評釈』『塩田評釈』『榊原新釈』『角川文庫』『野村評釈』など）。当の『新編全集』の見解としては、

しかし結局のところなお当時における「枕」の語は資料に乏しくてよくわからないというのが現状である。特にこの本に「枕草子」の名が冠されたのはやはり跋文によるところが多いものと考えられ、「覚え書き」といった普通名詞が、何らかの理由で特にこの書名として定着したというようなことで、案外落ち着くべきことになろうか。

とあり、やはり「覚え書き」を意味する普通名詞「枕草子」なるものが想定されている。

普通名詞とする根拠は、栄花物語に見える「衣のつま重なりて打ち出だしたるは、色々の錦を枕さうしに作りて、うち置きたらむやうなり」（わかばえ）という一節だが、これ以前の用例がないので、この草子の執筆時に「枕草子」が普通名詞として用いられていた証拠にはならない。また栄花物語の例は、重なった衣の褄の「厚み」を「枕さうし」に喩えているだけで、備忘録や覚え書きといった内容を示唆する要素は何もない（後述する本稿の跋文解釈からは、栄花物語の例は清少納言枕草子の影響と見なされる）[14]。つまり「枕草子」が備忘録であるとか、また「人にみせるべきでないもの」（2）「枕ごとを書き集めたもの」（5）だったという説明は、現存枕草子の内容や跋文の一節をもって、普通名詞「枕草子」を定義しているに過ぎない。（7）（8）のような典拠説、あるいは歌語「しきたへの枕」に拠る説も、下賜に至るほどの答えとして、それだけでは説得力を欠いている。

右の諸説以外に、「枕」の意味は「はっきりしない」が「既成の形式にはとらわれない自由な形態を意味することだけは、まちがいない」（『ほるぷ』）と、形態の自由をあげる見解もある。また三田村雅子は、清少納言の言葉自体は「寝具の枕にすればちょうどよいでしょう」の意としながら、その実態は、

限定された内容（歌枕、枕詞、枕言など）を指し示すものと言うよりは――もちろん、連想として予想されないことはなかったろうが、――その場の洒落と解すべきものであって、いわば内容については、清少納言にそのすべてが委ねられているところに、この草子下賜の焦点があるのである。

として、内容は非限定だったと説明している[15]。圷美奈子も「枕」は寝具の枕であり、そう答えたのは「何を書くとあえて答えなかった」

所に主眼があって、「自分に任せて欲しい」「これまでにない、全く新しいものを書きたい、書くべきである。書いてご覧に入れたい」という提言だったとする。[16]

能因本長跋によれば確かに「枕」は寝具の意となるのだが、同本の解釈は後述する。ただ両本とも、中宮の問い「これに何を書かまし」（能因本長跋は「何をか」）が、帝の「史記」に対して「こちらで書くなら何を書こう」の意であることは動かない。その答えである以上、「枕にこそは侍らめ」（三巻本）は「書くなら枕でございましょう」、「さば得てよ」は「ならば（そなたが）取って書け」という、「書くべきもの」をめぐる遣り取りが記されているはずだ。「枕」は文脈上「特定の内容を持った書物の名でなくてはならぬはず」（『角川文庫』）であり、「書くべき内容物を答えるのが当然」（『新解』）、「清少納言の案を（中宮が）採用するだけの実質内容を備えていた」（『新大系』解説）と見るのが正しい。ただ、『角川文庫』では「枕」が「手控えの草子を意味する枕草子の略」、『新解』は「題詞」、『新大系』では「歌枕の類」と解されている。その点には従えないこと、次節にて示していきたい。[17]

七、枕草子の成立

「史記」から「枕」へという連繋が、万葉以来の歌語「しきたへの枕」を想起させ、そこに秀句的な文脈が形成されていることは認めてよい。だが先述のように、それだけで下賜に至るほどの答えとは見なせまい。「しきたへの枕」はスパイスのようなもので、「枕にこそは侍らめ」の「枕」は特定の内容を備えた書き物、「枕草子」なる書名を指すと思われる。ただしそれは諸注の説くような普通名詞でも、備忘録や手控えの意でもない。これまでの考察を踏まえれば、この料紙拝領の時点で、清少納言が里で仕上げた初稿本は世に知られていたのだ。「枕草子」とは経房が持ち出した「この草子」にほかならない。

それが流布してゆく過程で、やはり何らかの呼び名が付いたはずである。「この草子」は書き手からの呼称だが、人々が単に「草子」と呼んでいたとは思えない。作中に手がかりを探るなら、ここでも跋文の記事が注目されよう。跋文によれば「この草子」は「畳に載った」状態で、最初の読者たる経房に差し出されている。それは中宮から贈られた「紙二十」を仕立てたものだった（二六一段）。『解環』は延喜式（図書寮）を参照して、この紙を「幅二尺二寸、高さ一尺二寸」の原紙二十枚と解し、それを四つ半に切って二つ折りにした形

を想定しているが、ひとつの目安とはなろう。少なくとも相当の頁数にはなったと思われる。その厚手の草子が畳に載って差し出されたわけだ。おのずとそれは「枕」を思わせるビジュアルとなる（畳と枕は縁語でもある）[18]。経房はこの草子を（中宮女房に）差し出す際に、「最初は枕のように見えました」などと状況を語り、おのずとそれが「枕草子」と呼ばれるようになったのではないか。その流布に伴って、書名も浸透していったものと思われる。従って書名の由来は、通説のように跋文二段落ではなく、四段落にこそ認められるべきなのだ。命名の起源となった場面が、当人によって改めてここに披露された形となる。

伊周献上の料紙が下賜される時点で、「枕草子」は世に知られていた。さらにそれは（先述のように）日記回想段のような内容も含む書き物だった。おそらく「枕草子」には、定子後宮の記録（存在証明）となるもの、といった共通認識があったのだろう。「書くなら何を書こう」という中宮の言葉を受けて、「こちらで書くなら枕草子、後宮の記念碑となるものでしょう」と答えたことになる。下賜はあくまでも提案後なので、〈私〉は「中宮が書く（書かせる）なら」という体で答えており、「自分が書きます」とまでは言っていない。ただ中宮にも「枕草子」（あるいは新たな「枕草子」）はどうかという心積もりがあって、彼女に言葉を掛けたのだろう。二人の遣り取りが阿吽の呼吸を窺わせる所以である[19]。

一方、能因本の長跋では、下賜までのやりとりが次のように描かれている。

「これに何をか書かまし」と、「うへの御前には史記といふ文をなむ、一部書かせたまふなり。古今をや書かまし」などのたまはせしを、「これ給ひて枕にしはべらばや」と啓せしかば、「さらば得よ」とて給はせたりしを、

「何を書こうか」「古今集を書こうか」という中宮の問いに、「これを（私に）くださって枕にしたいものです」と答えた、とある。三巻本のように直接「枕草子でしょう」とは答えず、あえて「寝具の枕」を持ち出して、それを示唆するに留めている。ただそれが三巻本より控え目（婉曲）な言い方になるかといえば、そうでもない。ここでは初めから「これ給ひて」と受けているからだ。その物言いがあつかましくならぬよう、冗談めかした返答に収めたのだろう。答えの趣旨としては「枕草子を書いてみたい」となり、初稿本枕草子を踏まえてこそ成り立つ対話である点は、三巻本と変わりない[20]。

伊勢守（長徳三年正月まで）だった経房が持ち出した「この草子」は、当然それ以降の日記回想段を含んでいない。跋文を付した再編本は、現存雑纂本のような形に、最終的には定子崩御後、寛弘年間までにまとめられたと考えられる。下賜の時点では「初稿本を清書する」程度の認識だったかもしれないが、実際には増補再編の手が大きく加えられていったわけだ。むろん下賜以降、執筆作業には取り掛かっていたであろうから、部分的には生前の定子にもご覧に入れていた可能性はあるが、現存本のような形では披露されていないことになる。最終的には宮仕えを退いた後、初稿本と同じく「つれづれなる里居のほどに」、初稿本よりはるかに多くの時間を費やしてまとめられたのだろう。

ちなみに、能因本の奥書には「さきの一条院の一品の宮の本」なる伝本の名が見える。実在した確証はないが、定子の遺児に献上された本があったとすれば、用いられたのは伊周献上の料紙（草子）と見るべきか。ただ（先述のような）跋文に見える読者意識などからは、枕草子の題材の選択や描き方には、身内の誰かには限定されない、より広範な読者が想定されていることが窺える。仮に献上本があったとしても、草稿なり写しなりは手元に残し、それが（女房時代の知己などを通して）世に広められていくことを見込んで、枕草子はまとめられたのだろう。

八、跋文解釈のまとめ（一）

以上の考察を踏まえた上で、解釈の結果（現代語訳）を提示しつつ、補足も加えて本稿のまとめとしたい。まずは一段落。

この草子は、目に映り心に思う事を「人は見ようとはするまい」と思って、所在ない里居の間に書き集めたのだが、不本意にも人にとっては不都合な言い過ごしと取られそうな所々もあるので、「しっかり隠しておいた」と思っていたのに、心ならずも（世に）洩れ出てしまったことだ。

「この草子」とは、現時点で既に「洩れ出」ていた草子、初稿本枕草子を指す。「（皆さんもご存知の）この草子は」といったニュアンス。

むろん、それを推敲加筆したものが（跋文を付している）この草子でもあるから、両者は厳密に区別できるものでもない。ただ、ここに記されている執筆と流布の経緯は、初稿本のそれに限定されよう。

初稿本の料紙は、二六一段に記されたような経緯で、中宮から頂いたものだった。中宮へのお披露目は想定されていたはずだから、「人やは見むとする」の「人」は、中宮（周辺）以外の人をさす。「つれづれなる里居」の時期は、一三八段や二六一段に描かれた、長徳二年から三年に掛けて。その間に「この草子」は執筆され、後文によれば源経房によって持ち出されている。またそこには「人のために便なき言ひ過ぐし」と取られかねない（日記回想段のような）内容もあったという。そうした内容まで書き付けたのは、外部の「人」に見せるつもりはなかったからだと、ここで弁明がなされているわけだ。初稿本から再編本へ、特に日記回想段が加筆増補されたことは間違いない。よってこうした弁明は、中宮（周辺）以外の読者が、この（再編本をまとめている）時点では強く意識されていることを明かしている。続いて二段落。

中宮様に内大臣が献上なさった紙を、「これに（書くなら）何を書こう。主上におかれては史記という書物をお書きになっている」などと仰せになったので、「（書くなら）枕でございましょう」と申し上げたところ、「ならば取っておけ」ということで頂いたのを、おかしな事をこれや何やと、尽きないほど多くの紙を書き尽くそうとしたのだが、まったくわけのわからない事が多いことよ。

一転して、これまでどこにも言及がなかった、伊周経由の料紙の存在が明かされる。初稿本の料紙については前掲の二六一段にて紹介済みなので、これこそが現在まとめている再編本の料紙の由来と判断される。

内大臣が中宮に献上した時期は不明ながら、清少納言に下賜されたのは、長徳三年晩春の「再出仕」（一三八段）以降、「詠歌御免」（九六段）の時期と近い長徳四年頃かと思われる。かつて里で執筆した草子は、このとき「枕草子」として世に知られていた。「枕」とはその「枕草子」を指す。一条天皇の「史記」に対し、歌語「しきたへの枕」も踏まえ、書くならば「枕草子」（後宮にとって記念碑となるもの）でしょう、と答えた。「自分が書きます」とまでは言っていないが、即座に下賜されている所を見ると、中宮は初めから清少納言に任せる心積もりだったのだろう。「あやしきを」以下は、ここまでの執筆作業を振り返ったもの。「こよや何や」（三巻本）の「こよ」は解し

難いが（能因本は「こじ」）、文脈から仮に「これや何や」の意と取っておく。最後の「物おぼえぬ事ぞおほかるや」には、擱筆を前にした現在の感慨が、謙遜を纏って吐露されている。

次に三段落。

大体これは、世の中の興味深い事、人が素晴らしいなどと思うはずの事を、そのまま選び出して、歌などでも木草鳥虫（の事）でも言い出したならば、「思った程よりはよくない。底が知れたものだ」と謗られようが、（実際は）ただ自分の心ひとつに自然と思い浮かぶ事を戯れに書きつけたので、「（他の）書き物に立ち交じって、並み程度には達していようという評判も耳にするはずはあるまい」と思ったのに、「気がひける」などとも目にした人は（評判に）なさるようなので、本当におかしな話であることよ。なるほどそれも道理、人の憎むものを「よい」と言い、褒めるものを「悪い」と言う人は、心の程度が推し量られる。ただ、人目に触れたという事が残念だ。

初稿本の執筆と流布に触れた一段落、再編本の料紙の由来を明かした二段落。右はそれらを受けて、改めて「おほかたこれは」と書き起こされた文章となる。では以上の文脈を踏まえたとき、三段落はどのように位置付けられるのだろうか。次節にて補足検証しておきたい。

九、跋文解釈のまとめ（二）

三段落の大意は、「これ」は世の趣向など気にせずに心のままに書き付けたものだが、読んだ人からは意外にも好評を得ることになり、それが自分でも不思議だったというもの。自作への評判を踏まえているので、さしあたり一段落と同じく初稿本に関するコメントと受け取れる。「木草鳥虫をも」という例示は三八段にも見えるが、現存雑纂本の前半に配置されている「木草鳥虫」関係の類聚段が、初稿本の時点から存在していたことを窺わせる（こうした「ものは尽くし」も広い意味で後宮の存在証明たり得るものだろう）。「ただ心ひとつに」以下の一節は、一段落の「目に見え心に思ふ事を～」と軌を一にする執筆姿勢を示す。謙遜の構えを取りながら、最終的には記事の

当不当は自分が請け負うのだという、擱筆時の矜持を物語る言説となっている。最後は「ただ人に見えけむぞねたき」と、これも一段落同様、中宮周辺以外の「人」にまで広まったのは想定外だったと結ばれる。

これらは大筋では一段落と重なる言説と見なされる。ただ同時に、再編本を目にするであろう読者がここでも強く意識されている。初稿本の評判を受け入れつつも、語られているのは再編本をまとめ上げた現在の感慨である。擱筆の時点から振り返れば、初稿本再編本といった区別は（内容に関しては）ないのだろう。結果として三段落は、自身にとっての「書くこと」すべてを総括するような文章となっている。再編本に発展吸収された時点で、おそらく初稿本のオリジナリティはなくなっていた。よって「これは」はという三段落の書き出しは、「こうして私が書いてきたものは」といったニュアンスで受け取っておきたい。[21]

最後に四段落。現代語訳は次の通り。

左中将（経房）がまだ伊勢の守と申し上げた時、里にいらっしゃった折に、端の方にあった畳を差し出した所が何と、この草子が（畳に）載って出てしまったのだ。あわてて取り入れたけれど、そのまま持っていらっしゃって、随分しばらくしてから返ってきたことよ。それから（この草子は）世に広まり出したようだ、と元の本にある。

三段落末の「人に見えけむぞ、ねたき」を受けて、いかにして「この草子」（初稿本）は世の「人」にまで広まったのか、そもそもの経緯が記される。「左中将まだ伊勢の守と聞えし時」と、まずは流布の時期が示されているが、源経房の伊勢守時代（長徳元年正月～同三年正月）は前掲の長期里居期に当たるので問題はない。

「この草子載りて出でにけり」「まどひ取り入れしかど」とあるのは、「よう隠しおきたりと思ひしを」（一段落）を印象付ける記述ではあるが、いかにもわざとらしく、実際は意図的に経房に差し出されたものと思われる。長徳二年、里に下がって間もない頃に中宮から贈られた「畳」、同じく贈られた「紙」を綴じた「草子」。両者を揃えて見せながら、執筆した「この草子」を中宮御所へ持ち込んでもらうよう、経房に働きかけたのだろう。度々の帰参の催促に応えられなかった負い目や、同僚との軋轢もあって、公式の献上は憚られたと思われる。さりげなく草子を届けて、中宮の気色を伺いたかったのだ。ただ、あくまでも「経房から」という体で持ち込まれたものなので、

返却も形としては彼になされたか。返却するならその前に書写もされていたと考えられるので、その後経房が世に広め、「いと久しうありて」清少納言に返された草子は、あるいは写しの方だったかもしれない。いずれにせよ、「この草子」を目にしたと思しい中宮は催促を再開、最後は「いはで思ふぞ」のメッセージによって、長徳三年晩春にようやく帰参は果たされる（一三八段）。「畳」に載った厚手の「草子」は、あたかも「枕」を思わせた。この逸話は「この草子」が「枕草子」と呼ばれるようになった由来も伝えている。

「左中将」という、もうひとつの経房の呼称は、（長徳四年十月の任左権中将以降）長保三年（一〇〇一）八月の任蔵人頭までの期間が該当し、これを跋文執筆時の下限と見るのが定説である。ただし、現存雑纂本からは寛弘六年（一〇〇九）までが執筆時として認められるので（一〇三段）、跋文執筆以降さらに段階的に手が加えられていったと解されている。だが加筆や増補があったとすれば、どの程度のものだったのか。増補前の形と認められる雑纂本が全く伝わらない以上、実体はわからない。ならば実体のないテキストをあれこれ詮索するよりも、現存雑纂本をもって跋文を付した最終稿の形と見なす方が理に適っていよう。[21]

ちなみに、三巻本における経房の呼称は以下の通り。

七八段　「経房の中将」（二類「少将」）

八一段　「左中将経房の君」（能因本「経房」）「左の中将」（能因本ナシ）

一三一段「経房の中将」（能因本ナシ）

一三八段「右中将」（弥富本「左」と傍書、能因本「左中将」）

跋文　「左中将」（能因本長跋「権中将」）「伊勢の守」

それぞれが異同を抱えるのみならず、事件時との齟齬もある（七八・八一段）。そこに「左」「右」の文字転化の可能性も加わって、極めて不安定なものとなっているが、相対的には「左中将」が優勢と見なせようか。経房は長保三年八月以降は「頭中将」、寛弘二年（一〇〇五）六月以降は「宰相中将」と呼ばれるべきだろうが、それはどちらも枕草子では斉信の呼称として、しかも相当のこだわりをもって使用されていた。[23] よって経房には、馴染み深い「左中将」が、跋文でも宛がわれたのではないか。長和四年（一〇一五）の任権中納言まで、確かに彼は「左中将」ではあったわけだ。枕草子の擱筆が寛弘年間であっても、経房が「左中将」と呼ばれる必然性は認められよう。

結び

跋文と呼ばれる文章から、枕草子の成立、執筆と流布の経緯について考察を試みた。跋文だけを読むと、謎であったり、虚構と判断されてしまいそうな箇所も、本編の記事と念入りに照らし合わせれば、以上のように矛盾なく解釈できることになる。跋文が説明不足に見えるのは、ここまでの記事のすべてを、あるいは読者に周知の事情を、逐一踏まえて記されているからだろう。その痕跡を可能な限り拾い上げることで、どこかを虚構として切り捨てる必要のない、整合性のある解釈が提示できたと思っている。

注

（1）本文（三巻本）および章段区分は『新編枕草子』（おうふう、二〇一〇）による。なお、跋文は能因本に二種類（短跋と長跋）伝わるなど、本文にも異同が多い。能因本跋については必要に応じて言及し、本文は『日本古典文学全集 枕草子』（小学館、一九七四）による。

（2）能因本には「宮の御前に、内の大殿の奉りたまへりし御草子を」とあり、伊周が奉ったものが「草子」と明記されている。

（3）テキストを統括する表現主体（書き手）に対し、描かれた動作（発話）が書き手自身のものであると判断されるとき、その作中の動作主体を〈私〉と呼称する。詳細は津島『枕草子論究』（翰林書房、二〇一四）序章参照。また、単なる状況説明に際しては「清少納言」という呼称も用いる。

（4）帰参時期については、津島「『枕草子』「殿などのおはしまさでのち」の段を読み解く」（『古代中世文学論考 第32集』新典社、二〇一五）参照。

（5）枕草子の原形は「類纂形態」だったとする、和辻哲郎や池田亀鑑などの説。

（6）山中悠希『堺本枕草子の研究』（武蔵野書院、二〇一六）。

（7）「人やは見んとする」については、渡辺実『古典講読シリーズ　枕草子』（岩波書店、一九九二）に「中宮に見せるのは当然のことで、他の誰かにわざわざ見せるべきものではないから、という気持ちでしょう」という指摘あり、首肯される。

（8）「はづかし」は「背後に人間乃至人間関係を予想させる」言葉であるから、そこに「既に日記的諸段が含まれていた」証しだろうという指摘がある（『鑑賞』）。

論者はさらにそれは「積善寺供養の段」（二六二段）のような記事ではなかったかと推定している（注19参照）。

（9）この点は旧稿（前掲『枕草子論究』第七章）でも論じている。

（10）能因本には「説経の講師は」の段に「されど、この草子など出で来はじめつ方は、かちありきする人はなかりき」という用例が見える（三巻本では「はじめつ方ばかり」とある箇所）。流布の時期を問題にしたもので、他の三例とは位相を異にする。

（11）前掲『枕草子論究』第七章。

（12）人物呼称の問題は、津島「五味文彦『枕草子の歴史学』の「新説」を検証する」（松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編『古典文学の常識を疑う』勉誠出版、二〇一七）でも触れている。

（13）五味文彦『「枕草子」の歴史学』（朝日新聞出版、二〇一四）。この新説には早速支持も寄せられているが（丸山裕美子『清少納言と紫式部』山川出版社、二〇一五など）、「枕にこそは侍らめ」は、後述するように「（書くべきは）枕でしょう」の意であって、何かを「（話の）枕にして書きましょう」とは解せない。

（14）『新編』補注でも栄花物語の用例は「本段の影響例」として引かれる。

（15）三田村雅子『枕草子　表現の論理』（有精堂、一九九五）三章の1。

（16）圷美奈子『新しい枕草子論』（新典社、二〇〇四）Ⅰ篇第四章。

（17）『新編』注には「枕」は「多義的」ながら「寝具という点が重要。秘めた思いを知る物として和歌に詠まれ、男女の交わりに関わる（枕席）。つまり后の務めの象徴。帳台に在り、「畳」の縁語」とある。命名の由来としてではなく、「枕草子」なる書名が抱かせるイメージとして押さえておきたい。

（18）注17に引いた『新編』注。

（19）初稿本の来歴を記す二六一段に積善寺供養の段が続くという章段構成は、雑纂両本に共通する。この形態と内容から、初稿本は積善寺供養随行記のようなものが中心だったのではないかと、論者は推測している。独自の視点で主家の慶事を再現して見せた実績が評価され、より上質の（取って置きの）料紙の下賜に繋がったと考えたい。現行本の積善寺供養の段は後の加筆を経たものだろうが、そこには跋文と共通する読者意識も窺える。

（20）能因本短跋には「枕にこそはしはべらめ」とあり、三巻本跋と長跋を足して割ったような本文となっている。

（21）能因本短跋は冒頭に「物暗うなりて文字も書かれずなりにたり。筆も使ひ果ててこれを書き果てばや」とあり、跋文を付している再編本を「これ」と呼ん

でいる。

（22）従来の跋文解釈に則り、跋文執筆以降に何段階かの成立過程を想定するのが定説となっている。最近ではそれをさらに詳細に段階分けする試みもある（斎藤正昭『「枕草子」連想の文芸』笠間書院、二〇一六）。だが現行本が伝えているのは、跋文を付した再編本以前に、世に知られた初稿本があったという情報だけである。現存雑纂本を見ても、編纂レベルでは三巻本能因本間の差異が確認できる程度で、それ以前の形態には辿り着けない。現存本による限り、それを跋文が付された再編本の形態と見なすほかなく、またそう解して何も不都合はない。

（23）前掲『枕草子論究』第五章。

＊枕草子諸注釈に関しては、以下の略称を用いて引用した。

金子評釈　金子元臣『枕草子評釈』（明治書院、一九二一）
新解　林和比古『枕草子新解』（文進堂、一九五三）
塩田評釈　塩田良平『枕草子評釈』（学生社、一九五五）
榊原新釈　榊原邦彦『古典新釈シリーズ枕草子』（加藤中道館、一九七六）
角川文庫　石田穣二『新版枕草子』下（角川書店、一九八〇）
野村評釈　阿部秋生・野村精一『古典評釈　枕草子』（石文書院、一九八〇）
鑑賞　稲賀敬二・今井源衛『鑑賞日本の古典　枕草子 大鏡』（尚学図書、一九八〇）
解環　萩谷朴『枕草子解環』五（同朋舎、一九八三）
ほるぷ　鈴木日出男『枕草子』下（ほるぷ出版、一九八七）
新大系　渡辺実『新日本古典文学大系 枕草子』（岩波書店、一九九一）
新編全集　松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館、一九九七）
新編　津島知明・中島和歌子『新編枕草子』（おうふう、二〇一〇、注釈は中島）